



関西学院大学リポジトリ

Kwansei Gakuin University Repository

## <リサーチノート> ワスパンの先住民族女性たちの ストーリーテリングによる伝承活動：デジタル・ ストーリーテリング導入前夜としての考察

著者	池田 佳代
雑誌名	KG社会学批評
号	10
ページ	37-45
発行年	2021-03-24
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10236/00029386">http://hdl.handle.net/10236/00029386</a>

## (2. リサーチノート)

### 2-2. ワスパンの先住民族女性たちのストーリーテリングによる伝承活動

——デジタル・ストーリーテリング導入前夜としての考察——

池田 佳代

#### 1 はじめに

デジタル・ストーリーテリング (Digital Storytelling = DST) とは、コンピュータソフトを用いてナレーションと写真や短い動画などを組み合わせ、数分の動画を作る 2-3 日間のワークショップとして行われる参加型活動である。4 人から 8 人ほどが円座になり、一人ずつストーリーの構想が話され、それへの感想をヒントにシナリオを構成し、それぞれが一つの映像作品に仕上げていく。この方法で完成した動画には感情に訴えかける特徴があり、そこに描かれた事柄が人々に強い印象を与えたり、省察が促されたりすることがある。このような DST の独特な作用を行動の改善や修正に役立てようとする実践が世界各地で行われている。

2017 年、先住民族ミスキートの人々が多く居住するニカラグア北部自治地域のワスパン市では、DST に取り組んできた組織の代表女性が市長候補に推挙され、当選するという出来事が生じた。われわれは、ワスパンにおける DST と女性市長誕生という社会変動との関係を調べる中、冊子 *Indigenous Women, Climate Change & Forests* (2011) に収録された一節に、その代表女性カニンガム氏が過去に執筆した「ワンキの祖母たち」(Cunningham: 2011) を発見した。ワンキとは、ホンジュラスとの国境を成すニカラグアの北端を流れる河とその沿岸の村々一帯を指すミスキート語<sup>1)</sup>の呼称である。ニカラグア併合時にその河は、公用語であるスペイン語でココ河とワンキとほぼ重なる土地はワスパンと名付けられ、地方自治体の 1 つとして構成された。カニンガムの記述は、ワスパンの歴史的的政治的文脈と、ワスパンの村落で伝承されてきた生活様式や規範についての聞き取りを内容とする調査報告である。

本稿は、「ワンキの祖母たち」の記述を手掛かりに、カニンガムの認識及び DST 導入前のワスパンの状況について、われわれの理解を増やすための一助とするものである。



図 1 点線内はワスパン市 (Wikipedia スペイン語版掲載図に袁銘雪及び池田加工)

1) ニカラグアは法的に先住民族の言語が認められており、ミスキート語も常用されている。

## 2 対象地域の概要

ニカラグア共和国は中央アメリカの中程に位置し、国土面積約 13 万 km<sup>2</sup> 程の、北海道と九州を合わせた広さに相当する。南北にコスタリカとホンジュラスと国境を成し、東西は太平洋とカリブ海に面している。太平洋側は熱帯サバナ気候、カリブ海側は熱帯雨林気候と同じ国でも気候が異なっている。内陸からカリブ海にかけて広がる国土の半分以上を南北 2 つの自治地域で構成し、そこに広がる密林にはアリゲーターなど大型動物のほか多種多様な野生動物が生息する。カリブ海側は特に川や湖および潟などの水源が無数にあり、土中には金などの鉱物が豊富である。先住民族ミスキートの人々は、これら天然資源を求めてに争う西欧列強の影響を受け続けた後、ニカラグアに併合されて以降は太平洋側からの支配を受けてきた。ミスキートとは、17 世紀後半にココ河 (Rio Coco) の河口付近の先住民族と黒人との混血により発生した民族的かたまりで、その後ココ河両岸に集落を拡大していったとされる (黒田・木村 2007: 27)。

ニカラグアの原生林は、1950 年頃には国土の 50% を占めるほど濃密だったが、2010 年には 25% まで減少している<sup>2)</sup>。その主な要因の第一は、1960 年代以降の政策による太平洋側での穀物栽培農地の綿花や牧畜用地への転換と内陸での開墾拡大である。その際、穀物生産農家たち (土地なし小農民) は内陸に押し出され、内陸の小農民らはカリブ海側に流入した (辻: 2016)。その結果、先住民たちの森が開墾され、白人と先住民族との混血であるメスティソ (太平洋側の人々) の侵入と定住が進む。第二は、1970 年代以降の政府や企業による、カリブ海側の森林地帯における材木用の大規模な伐採である。このような経過は、メスティソがミスキートの森を破壊したという意識をも生じさせていく。

ワspan市は首都マナグアから北東 632 km、北部自治地域の中心地プエルト・カベサスから北西 138 km の距離にある。面積は 9341.71 km<sup>2</sup> (INTER, 2000)、人口は 50,803 (MINSa Municipal, 2000) を擁し、市政と併行して 115 の共同体 (村落) でも独自の自治が行われている。内陸からカリブ海まで蛇行して走るココ河とその支流は村々を船で移動する主要な交通路となり、ココ河の水は飲用や洗濯などに使用される。1998 年に発生したハリケーン・ミッチの際には、長期間水に浸かったココ河沿岸の一部が削り取られ、2000 人以上が被害を受けている。良くも悪くも、人々の暮らしとココ河とは密接な関係にあるといえる。

ワspanの街には商店、学校、教会、市庁舎はあるが、銀行や郵便局はない。主だった産業がないため、地元の大学を卒業しても、仕事を求める場合は都会に出ていくことになる。街に居住するのは全体の 2 割弱で、住民のほとんどが郊外のココ河沿いの村落で自給自足的な暮らしを営んでいる。村落では電気やテレビがなく、煮炊きには石炭も使われている。

2) 出所: 林野庁, 「ニカラグア CDM 植林等森林・林業が関わる地球温暖化防止に関連する政策」 p.10-11, [www.rinya.maff.go.jp/j/kaigai/cdm/pdf/report\\_nicaragua.pdf](http://www.rinya.maff.go.jp/j/kaigai/cdm/pdf/report_nicaragua.pdf)

### 3 「ワンキの祖母たち」の背景：カニンガム氏とワンキタグニ、先住民運動

「ワンキの祖母たち」を執筆した Rose Cunningham Kain (以下、カニンガムと記す) は、1950 年生まれで、首都マナグア出身の女性だ。過去には、内戦でワスパンから避難した住民たちの帰還を支援する活動に従事した経験があるという<sup>3)</sup>。以前は教員をしていたが、1998 年に中央アメリカ一帯を襲った巨大ハリケーン・ミッチの後、母の故郷であるワスパンに居を構え、破壊された人々の生活再建にむけ活動を開始している。やがて、先住民女性組織ワンキタグニを設立するが、それは第 5 回世界女性会議 (通称：北京会議、1995 年) に参加した際に「どのような背景を持つ女性にも権利がある」との認識を得たことによる。ワンキタグニの活動資金は大小様々な資金で賄われるが、それはカニンガムが築いてきた国内外の活動家や市民組織とのつながりに支えられている。

ワンキタグニ (Wangki Tangni) とは、ミスキート語でココ河とその一帯を指す「ワンキ」と、花を指す「タグニ」を組み合わせた名称で、「ココ河のほとりに咲き誇る花々」という意味がある<sup>4)</sup>。ワンキタグニの主な活動は、村落の食糧不足を解消するための家庭菜園を支援すること、女性へのあらゆる暴力をなくすための集会を開催することである。2008 年以降、毎年行われる「リオココ先住民女性フォーラム」には、ココ河沿いの村々から 1000 人程の女性が集まり、学び、議論し、余興を楽しむ。深刻な夫婦間暴力の被害、少女への性暴力、ホンジュラス側への人身売買などを解決するため、共同体の役職を担う男性にも参加を呼びかけ、理解を広げる機会としている。

2016 年からはアメリカ合衆国ニューヨーク市に拠点を置くフェミニスト団体 MADRE の支援でラジオを開始し、ワスパン市内の全村に向けて、女性の権利、食糧生産や森林保全に関する情報を届けている。また、女性たちに新しい知識や技術を身につけるための研修が随時行われ、組織活動に生かすほか、失業中の女性たちの就職にもつなげている。ワンキタグニの活動は行政が担うべき仕事を補完する NGO として地域社会から認知されている。

「ワンキの祖母たち」が収録されている冊子 *Indigenous Women, Climate Change & Forests* の背景についても触れておく必要がある。序文によれば、そもそもは、REDD+<sup>5)</sup>の一環としてノルウェー政府が企画し、同国開発協力庁 (NORAD) の資金により推進された事業だとい

3) カニンガムが従事したのは住民の帰還が開始された 1985 年から 1990 年頃と思われる。

4) 柴田大輔氏によるカニンガム氏へのインタビュー記事 (2020. 9. 24, ラテンアメリカの「今」を届ける・第 3 回「私たちはもう、沈黙しない」～ニカラグア先住民女性性の闘い、ドットワールド、[https://dotworld.press/nicaragua\\_latam\\_america03/](https://dotworld.press/nicaragua_latam_america03/)) において提示されている。

5) REDD+ (レッドプラス) とは、国連気候変動枠組条約第 11 回締約国会合 (COP 11, 2005) で提案された「途上国の森林減少・劣化に由来する排出の削減 (略称: REDD)」に、COP 13 で導かれた「森林炭素ストックの保全及び持続可能な森林経営ならびに森林炭素ストックの向上」というプラスの概念を追加したもので、準備、試行、完全実施という段階的实施が求められている。(出所: 独立行政法人森林総合研究所)。本事例は、途上国においてよりリスクの高い集団として先住民の現状を把握した上、森林減少及劣化を食い止めるための行動を計画する準備段階に位置付けられている (*Indigenous Women, Climate Change & Forests*, 2011, 序章)。

う。当初の事業目的は第一に、気候変動の影響下にある脆弱性の高い森林地域の状況を調査すること、第二に、そこに暮らす女性たちの関わりや影響力を明らかにすることであった。事業開始後に加わったフィリピンの先住民運動組織 Tebtebba 財団からの提案で、その調査主体を森林地域の女性たち自らが担うことで当事者の意識化を図るという目的が追加され、2010年にニカラグア、カメルーン、ネパール、ケニア、ペルー、ベトナム、中国の森林地域で活動する先住民族女性組織らによる調査が行われ、2011年に全341ページの冊子として出版される。このような経緯からは、祖母たちへの聞き取り及びそれらを文字に残す作業は、国際的な活動組織の先導や関与がなければ成立していない可能性も考えられるだろう。

「ワンキの祖母たち」の本文は34ページあり、筆者の日本語訳では26,000字を超える。その記述の半分は、62歳から79歳までのミスキート女性7人（以降、祖母たちと称する）との対話から得られた詳細な語りが占めている。祖母たちは話をする条件として、録音しないこと、昔のように台所の階段の近くの外で話すこと、天然資源の場所などの詳細は記述しないことを求めた。それは過去に、外部からやってきた者たちがあらゆることを聞き出し、そして奪っていったからだった。そこで、カニンガムらは、一問一答形式を避け世間話しをするような楽しい雰囲気の中で聞き、メモは最小限にとどめた。終了後、ワンキタグニの事務所に戻り、話を聞いた女性ら4人でそれぞれの記憶をもとに整理していった。

祖母たちの語りは3件あり、第一は M. Escobar Bobb & Otilia Smith Duarte（以下、M&O）の2人、第二は Albita Solis, Lidia Wilson, Cleofas Solis and Pancita Clarence,（以下、A, L, C&P）の4人、第三は Prudilia Thomas（以下、P）である。祖母たちはみな、ワspan市郊外にあるキサラヤ村の住民だが、出身はそれぞれに異なる村だという。

#### 4 祖母たちの語りから浮かび上がるワンキの生活世界～過去と現在

##### 4.1 昔ばなし

「故郷を見たいがため ハゲタカになった女性」

かつて、サンディニスタ民族解放戦線が人々をタスバプりに移住を強制した時のこと、ココ河沿いの家から離れることをとても悲しんだ女性がいた。

（1980年代当時）彼女は、川の様子を見ようと思いの地まで飛んでいきたくなり、女性は羽のような布を頭に当て、家の階段から何度も飛びおりた。

当然、彼女にはいくつかあざが残ったが、彼女はそれを繰り返した。（Cunningham 2011: 2）

「ワンキの祖母たち」の書き出しは、上のような昔ばなしから始まる。そして、次のように続く。「スキア」（ミスキートの伝統的な治療師の役名）に助けを借りて、目を閉じてワspanに飛んでいくと、懐かしい風景が見え、その先に鉦山からの汚染水を飲んだ動物が死ぬ様

子、葉をまいて魚を捕る様子が見えた。次の飛行で目にしたのは、すべてが破壊されて暗く薄汚れた、故郷の無残な姿だった。彼女はその様子を受け止めきれず、強い痛みを感じた後、すべての羽が黒くなってしまい、「ハゲタカのような姿と苦痛に満ちた黒い魂とともに彼女は飛んで行く」と結ばれて、物語は終わる。

物語に登場する「タスパブリ」とは、ワスパンから 150 km ほど離れた内陸にあり、当時は避難の途上で年寄りや家畜など多くの命を失ったという。戦場となったワスパンでは、農場も家も全てが破壊しつくされ、大量の地雷が残されたことなどから、帰還をあきらめる住民も多かった。汚染水とは金の採掘に水銀が使用されたこと、魚を痺れさせる薬剤を撒く漁法を指していると思われる<sup>6)</sup>。この物語は、ワスパンの人々が受けた強い喪失感や心の傷を象徴的に伝えている。

#### 4.2 祖母たちの語り

あの頃と今は…、すべてが変わった。私たちはもはやセレナーデを聞いていない。中庭でスズメとチャチャラカの鳥たちのさえずりを聞いたほうがよかった。

M. Escobar Bobb (Cunningham 2011 : 12)

この言葉からは、多くの生き物たちが姿を消した現在では、チャチャラカという騒々しい鳥の声でさえも懐かしいという思いやもの哀しさを感じられる。以下、祖母たちの語りのうち、過去と現在を対比しながら現状を問題視している語りを中心に取り上げていく。

私たちは子供たちや孫たちに、過去の暮らし方や働き方を教えているが、今はそのような仕事をしていない。私は息子に、最近の食べ方ではなく、子供たちによい食べ方を教えなければならないと言う。今では以前のように魚を釣ったり、調理したり、食べ物や種子を保存したりしない。土地はもはや過去と同じものを生み出さない、当時と同じことはできない。小川は干上がり、本流のココ河も枯渇しつつある。川と共に、私たちの文化も死にかけている。〔P による語り〕 (Cunningham 2011 : 26)

これまでは水汲み場、入浴場、洗濯場があり、目的ごとに指定されていた。石鹸は使わなかったの、水は今のよう汚れていなかった。今は、どの川も汚れている。指定された場所での入浴や洗濯は行わなくなった。〔M&O による語り〕 (Cunningham 2011 : 13)

洗濯は棒で服を叩き、レモンで洗った。服に柔らかく泡立つグアコ種子を使った。〔A, L,

6) ワスパン周辺の水銀による深刻な健康への影響はアメリカ政府による調査報告からも確認できる。Rosario, Joana/ Ault, K. Steven, 1997, "Activity Report, No.33", Environmental Health Project, [https://mafiadoc.com/activity-report-usaid\\_5a0563d41723dd8157b4f18a.html](https://mafiadoc.com/activity-report-usaid_5a0563d41723dd8157b4f18a.html)

C&P による語り] (Cunningham 2011 : 16)

ここで述べられている「最近の食べ方」とは、スナック菓子や清涼飲料水など油や砂糖を多用する加工品のことを指していると思われる。このような食生活の変化が生産力の低下につながっていると語っている。また、以前は河岸でイグアナや亀をよく見かけたこと、川岸や森を保持するため伐採は最小限に抑え、木を植えて減らさないように補ったこと、農作業に精を出すことで十分な食料を得て隣人に分け与えることもできたことなどを語っている。

私たちの祖先は1月から12月までの月の始めを特定する方法を持ち、天気は風、動物、月、太陽からの兆候を使って予報していた。[M&O による語り] (Cunningham 2011 : 13)

気候が変わった。米はかつて4月に蒔かれていたが、今では4月に播くと焼けてだめになる。[A, L, C&P による語り] (Cunningham 2011 : 18)

1月、シャクワ・カティ、小さな亀の月と呼ばれ、小さなカメが歩いて川に移動し始める。それが見えると、草を刈り、畑を準備する。2月は、クサ・カティ、雌亀の月で、川や入り江で大きな雌亀が産卵のため出てくる。人々は川岸で寝泊まりし、豆を収穫し、田植えを準備し、数か月かかる家の建て替えに着手する。[P による語り] (後略 : 12月まで続く) (Cunningham 2011 : 30-32)

祖母たちは一様に、農作業の暦は生物たちの営みと気候のリズムに合わせた規則的な営みとして構築され、それが収穫の安定をもたらしたと語り、現在のように気候が変化したことで従来の暦が役に立たず、生物たちの営みとのずれが生じていると証言している。

月が出たら子供たちに遊びや物語を教え合う。それらはすべて、動物、山、水と関係があった。私たちは虎、イグアナ、猿、亀やサメなど動物のふりをして、それが何か当てる遊びをした。しかし、最近では昔と違う。今は、街に住み、テレビを見て（そこに映る生活を）真似したいようだ。[P による語り] (Cunningham 2011 : 27)

親たちが種まきや漁労、狩猟に出かけているとき、老人が家の世話をした。今では、私たち女性は娘たちの世話をしなければならない。なぜなら、その数カ月の間、老人たちが娘たちを虐待するから。[P による語り] (Cunningham 2011 : 33)

祖母たちは、生存に必要な知識や営みが学校などの集団単位ではなく、家庭生活の中で母から娘に、農園や水辺および平原での作業を通じて親から子へ作業を伴って伝えられたと述べている。村の慣習などは家族的な隣人関係の中で伝承されたようだ。ある祖母は、日中は実践的

に、日暮れ後には遊戯的に行われてきた伝承の形式や内容を多数示しながら、それらを伝える役割の大人たちはどの家庭においても模範的存在であったと述べている。若い世代が村を離れて町に住み、自給自足よりも貨幣経済に順応している様子や、老人が少女を虐待する様子を、大人たちの劣化した一面として比較的に伝えている。

1974年と1978年にハリケーンが多くの作物を襲い、枯らした。キサラヤ村では水が高い丘までのぼった。続いて大飢饉が起き、全てを失った。私たちの祖先はその対策として、大きな枝を切りとり、小さな溝を掘って、強風から作物全体を保護する風よけを作ることになった。〔Pによる語り〕(Cunningham 2011: 24)

(戦争のとき) 家族はサンタマリアに移され、多くの人が家畜とともに亡くなった。その後、多くの人々が昔の村に戻ったが、破壊以外の何も見つからなかった。ワンキは二つの戦争を経験してきた。モクロン戦争、もう一つはサンディニスタ革命政権が支配していたときの戦争である。〔Pによる語り〕(Cunningham 2011: 30)

刑務所はなく、法と秩序は村の全員が遵守した。人々の間に争いが生じた場合には、長老たちが集まり、法を施行する。〔A, L, C&Pによる語り〕。(Cunningham 2011: 17)

掟を破ればだれでも、森林や岸辺を守る主ダワンによって死に処された。今、これらの存在は消え去り、若者たちはもはやそれらに敬意を払ったり恐れたりしなくなった。〔A, L, C&Pによる語り〕(Cunningham 2011: 18)

シンディコ<sup>7)</sup>は私たちの領土を管理するために選ばれた。代理人として、伐採、土地や資源を売買する前に、共同体の長老や総会で人々に相談しなければならない。もし、役割を果たさないなら、違う人を選ばなければならない。ウイタ<sup>8)</sup>たちは村の判事であり、ミスキート法やニカラグアの法律に精通している必要があるが、中には、何も知らず、虐待された女性を助けられないウイタもいる。〔Pによる語り〕(Cunningham 2011: 28-29)

祖母たちは、水、山、森などあらゆる場所に存在する「ダワン」など自然界の守護者たちの怒りを買うと、恐ろしい報復や災いが起きると語っている。伐採した分は再植林して絶やさないと森の掟を破ると正体不明の病に罹ること、魚を乱獲すると人魚に沈められることなどが例示されている。そこには、霊的な存在を通して独自の規範意識が形成され、行動が制御さ

7) シンディコとは村落で共同管理する土地の使用許可や境界監視を行う役で、住民の中から1名選任される。

8) ウイタとは村の判事役で、村落内の紛争の仲裁や事件被害者の保護にあたる役で、住民の中から1名選任される。

れ、不当な行為が戒められ、秩序が保たれてきた様子が表れている。ある祖母は、それら秩序の維持に尽力してきた長老たちに代替された現在の村の代表者であるウイタヤシンディコらの中には、従来のように秩序を保つ役割を果たさなばかりか汚職に走る者がいると語り、問題点を強い調子で指摘している。

### 4.3 小括

われわれは、祖母たちの語る経験がいつ生じたことなのか示されていない記述についての年代を特定するため、複数の通史的文献に現れる事象と照合しながら読解を進めた上、次のような理解に到達した。ワスパンに定着したミスキートの人々は、その時代ごとに生じた自然環境の変化や天然資源の収奪あるいは戦争など外部からの影響を受ける中、それらへの対策や教訓は伝承を通じて内部に伝えられ暮らしを持続させてきた。親から子への口頭伝承は、天然資源の存在、生態系や風物、民族の精神性などを授ける教育的側面と秘匿の伝達も含まれる。しかし、最近では、伝承を受け取るべき祖母たちの子ども世代はそれを受け入れないばかりか、共同体の存続に貢献してきた長老会を頂点とする仕組みを軽視し、外部者と通じて不当な土地利用や人身売買に手を染めるなど腐敗が横行し、生活不安が生じている。このことは、ワスパンにおいてミスキートの文化や伝統がうまく継承されていない状態、すなわち伝統の伝承が滞っている状態にあるといえる。

カニンガムら調査メンバーにとってこの調査は、たとえこれまでの日常生活の中で断片的に年長者たちから聞いたことがある事柄であったとしても、調査を通じた一連の流れとして収集したことで、ワスパンの歴史的な文脈やミスキートのアイデンティティを改めて自覚する機会になった可能性がある。そして、同時に、祖母たちからその子どもたちの世代へとつなぐべき口頭伝承の停滞を認識したに違いない。

私たちリオココの先住民は、母なる大地（ヤプティ・タスバ）が病気で苦しんでおり、川が死の危険にさらされていることを確信する。私たち先住民の女性は、自分たちの考えや言葉を宣言し、議論し、貢献しており、私たち自身を含むあらゆるレベルで行動を起こすことができる。我々は、提案及び行動計画を地方議会、非政府組織及び協力機関に提示している。(Cunningham 2011 : 10)

(中略)

この事例調査では、気候変動として知られるこの危機から我々自身を救出し、豊かな暮らしへの道を開くために必要な変革を加えるため、現代の文脈で再展開できる知識を収集することができた。(Cunningham 2011 : 11)

上記の記述には、村での生存を未来に向けて維持するため、祖母たちの伝承は重要な知識が含まれているという認識が現れている。ただし、それをどのような方法で再展開するのか言及されていないため、当時はまだそれを見いだしていないと思われる。しかし、文末において、

祖母たちから得られた知識や実践を役立てることで劣化した資源を回復できれば、気候変動の脅威にさらされているワスパン市の人々をよりよく保護することができるだろう (Cunningham 2011: 31) と結んでいることから、口頭伝承に代わる方法を用いて人々の困窮状態を改善したいというカニンガムらの意欲が強調されているといっていよう。

## 5 おわりに

カニンガムらが「ワンキの祖母たち」に取り組んだ翌年にあたる 2011 年の秋、ニカラグアで頑張っている女性たちにも DST を教えてあげてはどうか、という日本の NGO のメンバーの案内で筆者はワスパンを訪問した。一例として上映した 3 分のデジタルストーリー (DS) を視聴したワンキタグニの女性たちは、「作ってみたい」「一人一人が参加している気持ちになってよかった」などそれぞれに感想を述べた。カニンガムは「いつもはコンピュータで計算したり文章を書く作業をいやがる 50 代の女性が『やってみたい』と発言したことはよかった。物語るといふ、親しみのある活動が含まれていることがそのような気持ちにさせたのかもしれない」と述べている。カニンガムはこの時、ワスパンの中で滞っているミスキートの伝承を再展開する方法として DST が役立つかもしれない、と考えを巡らせ始めた可能性がある。その翌日以降、カニンガムは筆者らを伴い、ワスパン以外の街や村でコミュニティの課題に取り組む女性たちを集め、DST を活用できないだろうかと呼び掛けて回った。その時点では実施するかどうかが結論は出なかったが、その 1 年半後の 2013 年 4 月、ワンキタグニの会議室でワスパン市で初めての DST ワークショップが行われる。

その時に完成した DS には、祖母たちの語りと重なる要素が多く含まれている。例えば、木材の不足、レイプの危険、避難先から帰還、ココ河の保全などで、祖母たちの語りが再現されているという見方もできるだろう。それら DS は、キサラヤ村の女性の集まりで上映され、地元ラジオから定期的に放送され、村の役職者たちの会議で上映されていく。このような流れから、祖母たちへの聞き取りはワスパンにおける DST 導入の前夜であろうとわれわれは考える。その考えを確かなものにするためには、DST を継続する過程で、人々は何を伝えようとし、そこにどのような変化が生じたのか、詳細にみていく必要があると思われる。それにより、ワスパンでの初の女性市長誕生と DST との関係を読み解いていきたい。

### 【参考文献】

- Cunningham Kain, Rose, 2011, "The Grand Mothers of the Wangki," Tebtebba Foundation, *Indigenous Women, Climate Change & Forests*, Baguio City: Valley Printing Specialist, 3-39.
- 黒田悦子・木村秀雄編, 2007, 『講座世界の先住民族ファースト・ピープルズの現在 08 中米・カリブ・南米』明石書店.
- 辻豊治, 2016, 「ニカラグア太平洋岸地域における開発・自治と運河計画の影響」『京都外国語大学ラテンアメリカ研究所紀要』16: 75-91.